昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和三十三年十月十五日発行（毎月一回・十五日発行）

慈光

（通第一〇五号）

目次

至心廻向の意義（三）……近角常観…（1）
父と子……池山栄吉…（4）
章提希夫人……福島政雄…（8）
清浄心……自在丸新十郎…（11）
心光照護の生活……花田正夫…（17）
正信偈私解（六）……白井成允…（20）

第十卷　第十號

至心廻向の意義（三）

近角常観

さて次は信楽である。この信楽がまた手軽い事で私の心に頂かれたのでない。聖人はお示し下されて曰く、

「信楽と言ふは則ち是れ、如来の満足大悲円融無碍の信心海なり。この故に疑蓋間雑することなし。故に信楽と名く。即ち利他廻向の至心を以て、信楽の体とする也……」

即ち如来は満足大悲円融無碍、底の底までこの私が可哀いとのお慈悲の〳〵塊りでまします。その広大のお心より、一厘一毛の疑もなく、飽く迄私に、まことに〳〵して下さる、その遣る瀬なき如来の信楽が、私の心に届いて下された処で始めて頂けるのである。

○

処がこれが始めより頂かれるに非ず、

「……然に無始よりこのかた、一切の群生海、無明海に流転し、諸有輪に沈没し、衆苦輪に繋縛せられて、清浄の信楽なく、法爾として真実の信楽なし……」

能く我々は、信ぜられぬ、喜ばれぬ、とかこつのであるが。既に斯く聖人は仰せ置いて下さるのである。

「是を以て無上の功徳値遇し難く、最勝の浄信獲得すること難し。一切の凡小一切時の中に、貪愛の心常に能く善心を汚し。瞋憎の心常に能く法財を焼く。急作急修して頭燃を炙ふが如くするも、すべて雑毒雑修の善と名く。亦虚仮諂偽の行と名く。真実の業と名けざるなり。この虚仮雑毒の善を以て、無量光明土に生ぜんと欲するは、これ必ず不可也。何を以ての故に、正しく如来菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修、乃至一念一刹那も疑蓋雑ること無きに由つて也」

即ち信楽は私の信楽にあらず、如来の信楽である。如来が斯く一念一刹那も疑はず隔てず、飽くまでこの疑ひの私に善くして下さる。この如来の遣る瀬なき信楽で、始めて私

の胸の中に「あゝ有難い」と頂かせて貰はれるのである。故に我々が一念「あゝ有難や」と頂くこの一念の信心は、即ち如来の信楽を頂くのである。これが如来廻向の信楽である。故に次には

「……斯の心は即ち如来の大悲心なるが故に、必ず報土の正定の因となる。如来苦悩の群生海を悲憐し給ひて無碍広大の浄信心を以て、諸有海に廻施したまへり。是を利他真実の信心と名く。云云」

○

殊に有難きはこの三心釈に於て、度々「疑蓋雑ること無し」と繰り返しお示し下されてある事である。仏は私がこの疑ひの心に閉され、そのために種々狂はされて居るを見て、それが不愍で仕様なく、其者に届ける為、身口意の三業、一念一刹那も疑ひの心を雑へず、飽くまで私を信じ善くして居て下さるのである。この遣る瀬なき仏の信楽ましますため、遂に私の疑深き心に、それ程までに信じ給はる仏の大悲なりしか、あゝ有難やと頂かせて貰へるのである。これを人生的に言へば、我々の信ずると言ふは、充分で無けれども、信ずる、善くないけれども信ずると、人を信ずると言へば善きに似たれども、結局は善くないけれども〳〵と我慢してゐるのである。処が仏は、私のその善く無いのが哀れで見て居られぬと、飽くまで其者に清浄にし、飽くまで其者に真実にして下され、此に一点疑ひ雑へぬ如来の御苦労によつて、その如来の満足大悲が私の心に貰はれるのである。これが一念の信心であります。

○

次に欲生は浄土に生れ度いと思ふ心である。我々は此の世に生き度いとこそ思へ、浄土に生れたいなどの思ひは微塵もない。近頃は生活問題がやかましくなり、この間も或新聞に、仏教家など何をして居るのであるか、南無阿弥陀仏を称へて腹ふくれた事あるかなど書いてあつた。処が仏は、我々がかく此世に執着して日々浅間しき日暮しを続けてる、この迷ひの有様を御覧下されて、それが可哀想であると、極楽無為涅槃界を荘厳し、理想的の国土を建設して、それへ生れ度いと思へと、仏の方より呼びかけて下さるのである。これがこの欲生のお心である。聖人は仰せられてのたまはく

「……欲生と言ふは、則これ、如来諸有の群生を招喚したまふの勅命なり。即ち真実の信楽を以て、欲生の体と為るなり……」

即ち欲生は、地獄にうろつき度き私を、飽くまで我が国に生れんと思へと、呼びかけ給はる大悲の御親心にてまします。この親心は、即ち如来の遣る瀬なき満足大悲の御心なれば、即ち信楽を以てその体とする也である。

○

「……誠に是れ大小凡聖、定散自力の廻向に非ず。故に不廻向と名る也……」

故にこの欲生心は私にて起るに非ず、如来御廻向の頂き物なれば、即ち不廻向の心と言ふ。

「……然に微塵界の有情、煩悩海に流転し、生死海に漂没して、真実の廻向心無し、清浄の廻向心無し…」

然るに如来廻向の源を尋ぬれば、即ち私が無始以来生死海に惑溺して、人に善くしたいといふ廻向心も無ければ、往生を願ふ欲生心も全く絶え果てゝある。そのために如来は大悲の胸を痛め給はりたのである。而して此の者の為に、如来の御苦労は如何に。

「……是の故に如来、一切苦悩の群生海を矜哀して、菩薩の行を行じ給ひし時、三業の所修、乃至一念一刹那も廻向心を首として、大悲心を成就することを得たまへるが故に、利他真実の欲生心を以て諸有海に廻施したまへり。欲生は即ちこれ廻向心なり、斯れ即ち大悲心なるが故に、疑蓋まじはることなし。云云」

即ち私が斯る者であるが故に、此の者のために如来が一々の行をして下された時、私があの如き事して居るから、早くわが親心を届けてやりたいと、一々の行みなこの廻向心を首として御成就下されてある。而してこの広大の廻向心を以て、早く浄土に生れんと欲へと、十劫以来呼び詰めにして〻下さるのが、此の如来廻向の欲生心である。故に我々がこの広大の御呼声によつて弥々お慈悲に振り反つた一念に「願生彼国、即得往生、住不退転」と、彼国に生れんと願ふ心が起るのである。而してこの往生は、死ぬる時往生するに非ず、此のお心の届いて下された時が、即ち往生である。ハイと頂けた一念に不退転に住するのである

○

さて斯く順次頂き来る時は、要するに此の私の心中に浅間しき根性がある計りに、如来は至心・信楽・欲生三心を御成就下されたのである。若し私の心に何も無いならば、如来はこの御苦労はして下さらぬのである。さればこそ弥々このお慈悲の頂けた一念には「あゝ長々申訳なかりし」と親様の前に、久遠劫来の頭が下り、今までの不足の思ひが消え、五分々々の根性が止み、煩悩の根切れがさせて貰へるのである。聖人は、横超断四流の言をお示し下されてのたまはく

「……断と言ふは往相の一心を発起するが故に、生としてまさに受くべきの生無く、趣としてまた到るべきの趣無し。すでに六趣四生の因亡し、果滅す。故に即ち頓に三有生死を断絶する故に、断と言ふなり。……」

とまことに広大の大悲であります。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

父と子

池山栄吉

わたしの隣家に、やう〳〵誕生になつて間もない赤ちやんがある。若い御夫婦の間に出来たはじめての女の子。

このごろ——といつても、こゝ二月か三月かほど——どうかすると、ときたま或声、何か節のある歌のやうな声が断片的にきこえてくる、低い太い声である。始めはやゝ遠くかすかにそしてそのまゝ遠のいて消えて了ふこともあるしだん〴〵遠く、ゆつくりと近づいてくることもある。

メロデイには聞き覚えがある、その筈だ。家の前にさしかゝるのを聞いてゐると、軍歌だ、此頃町のどこででも聞く、大人も子供も歌ふ日清日露戦争当時の軍歌なのだ。

しかし今聞く声は大勢のではない、一人なのだ。しかも子供のではない、たしかに歴乎とした男の声だ。

さあわからない。なんぼ非常時の真最中、日支事変、戦正に闌なりの秋とはいへ、大の男が昼日中、となり近所にきこえる程の声で、軍歌を歌ひながら、一人ぶらぶら表を歩くなんて？正気の沙汰ではあるまい。が、あたりはひつそりとして、石を投げる悪輩の気配もなし、当人もいとも静かに通つて行くらしいので、変だなとは思ひながら、わざ〳〵外を窺つて歌の主を見極める労を取るでもなくそのまゝ過ごしてゐた。が、そのうち家族のかたるところに依つて事情が判明した。歌の主は隣家の若い御主人、いつもきまつて嬢ちやんをだつこして。あゝさうか、と云つたようなわけ。

総じて子供には、寝起きのわるいのと、寝就きのわるいのとあるらしいが。嬢ちやんは後者に属する方と見える。目がさめたときは、にこにこして御機嫌なゝめならずだが、ねむくなりかけるのを合図にむづかり出す。さあさうなると、どうだましてもすかしても、なか〳〵御機嫌が取結べない、全く手におへなくなる。寝就きのわるい子に対する最上の方策として、古今東西を通じて、恐らく人間の

親子といふものが存在してからこのかた、普く認められ、用ひ慣れ来つたものに子守唄がある。

となりの若い主人公は、今その手をやつてゐるのだ。むづかり出した嬢ちやんはお父さんの懐で軍歌に聞き入りながら、近くの樅林のあたりまで来ると、大抵寝入つてしまふのださうな。さうと知つてからは、例の歌声がひびいてくると、思はず微笑まずにはゐられない。なんともいへない和やかな心地。万有のうちに鳴り渡る諧調そのものを見聞するやうな、ファウストならば〃まてしばしなんとおまへは美しい〃と叫ぶであらうところの。

世に子守唄は数限りもなくあるが、然しそれはただ子守唄としての定めを持つてゐるといふだけで、子守唄必ずしも子守唄として用ひられるとは限らない。本来子守唄でないものが、子守唄として代用される場合も尠くない。かうした場合、歌の内容よりも、歌手の目的が決定を与へる。

今問題となつてる場合もやはりさうで、内容、規定の上からいへばたゞの軍歌であるが、目的、実践の上からいへば、立派な子守唄である。本来軍歌であるものを子守唄として扱ふ。そこにいくらか創作的意義が含まれてゐる。一種の軍歌的子守唄、かうした意味でのお父さんの創作が子守唄として、聞く嬢ちやんの耳にはいつてゆく。

歌と酒、酒と眠り。かういつた風に組合はすと、その間或程度の関聯が認められるが、歌と眠、この二つの間には、本来直接の困果関係はない。だから守する人が、自分勝手な好きな歌を歌つたからつて、子供はねむらない、またはねむれない。子供の眠りを催させるには、本来の、若くは代用された子守歌でなくてはならない。

しかし子守唄にもせよ、それを聞く子供はどうして眠れるのだらう？子供は——皆が皆さうとも限るまいが概していふと——決して眠るといふことを望むものではない。目のあいてゐる限り、何かしよう、積極的に心身を働かせようといふ望みで一ぱいである。ねむたさにくつつきかゝる目を、我慢して押しあけて、何かしようと気張るのが常である。この傾向は七つ八つから十前後のいたづら盛りの時分に殊に著しい。蓋し子供にあつては、かなり大きくなるまで、寝たいといふ欲求は、身体にはあつても、意識には上らないのである。

ましてまだ頑是ない幼児にあつては、眠りたいといふ欲求が直接意識に上る筈はない。従つて陰に睡眠の必要に迫られてゐても、陽に眠らうといふ態度には出ない。たゞ何か外のことをしようと焦る。眼耳鼻舌身意の孰れかを働かせようとするんだが、ねむさに圧へられて、思ふまゝにならない。さうした矛盾撞着がすなはちむづかりの因になる。だから守する人が、子供の陽の注文に応じて、菓子を

やつたり、玩具を持たせたり、人形を抱かせたり、画本を見せたり、望むがまゝに手に手を尽してなだめようとしても全く駄目。子供は意識しない不可抗的なねむさに支配されてゐるのだから。

そこを見抜いて、子供の眠をさそふ手段を講ずるのが、子を守る人の思ひやりである。そしてその唯一恰好の手段として選ばれたのが子守唄である。

子守唄はどうして子供を眠に引入れるのだらう？

それは唄に心を集中させるから。

どうして集中させるのだらう？

なぜかよくはわからないが（一寸心理学でも調べて見たいやうな気もするが、手許に材料がないからまあそれにも及ぶまいとして置く）一つには歌の文句や節にもよらうし、一つには歌手の心にこもる声にほだされて、ちつと耳をすますからであらう。がまた一つには、聞いてる間に、何とはなしに、今きく声が他の何ものにもまして、しつくり心にかなひ、時にはさうした自覚をさへ伴ふからであらふ。かうした歌に聞き入るうち、他面、餘の雑念が遠のいて唄に一心するからであらう。

歌に聞き入るのは暗に歌ふのである。よく聞く者は、歌手と合唱若しくは輪唱するのである。歌を伝つて歌手の心が聴手の心に通じるのである。聴手の心が歌手の心を受入れるのである。かうして眠が結果する。

眠は子供の心の奥に潜む欲求である。歌はその欲求の意識しない欲求である、その欲求を充たしてやらうが為、心をこめた子供への贈物が子守唄で、それに引かれて、たゞほれぼれと合唱輪唱するのがよく聞く者の態度である。かうして事実のうちに織り込まれた子守唄は、概念的な、単なる見本として陳列されたそれではない、活用された、謂はゞ〃生ける子守唄〃である。

今私達の眠に浮ぶ〃生ける子守唄〃の父と子。わたしはこの心象によつてそこばくの教を聞く。

わたしは先づ、信ずる人が仏に抱かれる姿を見る。子供姿のイエスキリストを抱く聖母マリア、ラファエルの名画に見とれる感がする。

〃一々のものが互に織り交つて全体を形作り
一つのものが他のものゝうちに生きて働く〃

なんたる美観だらう！しかしたゞ美観（ファウスト）であるだけに止まるであらうか。

〃親鸞はたゞ念仏して〃〃親鸞一人がためなりけり〃〃
かくのごときのわれらがためなりけり〃

かうした言葉を聞いても、一応感心もするし、憧憬もするが、おなじ思ひを我みづからに実感することの出来ない人、乃至、しようとしない人、これらの人々は、いつまで

たつても、ただ傍でみる人であるに過ぎない。信仰の事実、情景に接しても、いつも自分を第三者の地位に置いて、単なる観賞の態度以上に出ない人、かうした人が余りにも多きに過ぎるのは遺憾に堪へない。

莞爾として心象を眺めてゐた私は、やがて、なんだかたましひがからだから離れて行くやうな微妙な感じに驚かされて、更に一段と目を見張つて心象を見直すと、何ぞ計らん、自分自らをその中に見出したのであつた。

あの赤ちやんが私なのだ。私は子守唄を聞いてゐる。わたしの子守唄は念仏だ。歌手は云ふまでもなく仏、一心正念直来と呼びかけたまふ仏なのだ。

子守唄の父と子について言へることは、類推的に仏と人についても言へる、従つて経論聖経の多くは子守唄の父と子のどこかに納まると言つてもいゝ位、子守唄に結ばれた父と子の心象は、広く且つ深いものである。

悪戯に惚けて、ねむたさを意識もしないでゐる子供に、本当の安らかさを与へようと、意識下なる欲求を見通して、それを喚びさますてだてとして子守唄を工夫し、倦まず撓まず歌ひきかす真心がとゞいて、耳を澄ます子の心に、何よりも勝る歌の善さが泌々と感じられて、遂には声を合はせようと思ひ立たせる。

これと類似の展開が仏と人と念仏とに認められ、かくて人生究極の欲求が充たされ、人生最高の理想が現前する。

22 夏より

以上三願転入の文について些か愚解を述べたのであるが、猶一二反省を要する問題が残り存してゐる。其の一は三願に照らして自心を省みること。其の二は祖聖伝中所謂寛喜の内省と称せられる事の意味である。新らしい学者達は此の後者を分析することによりて、祖聖が所謂三願転入して真実弘願の信心に徹せられた時期を此の寛喜の内省の頃に在るとし、而して其に祖聖の信が法然上人の其を超え出でたる消息を見ようとしてゐるようである。此の分析は巧みの如くであるけれども、私には直に肯はれ得ない。そして此の如き見解の相違を来たす根拠には、所謂弘願の信心といはるゝ心相が如何なるものかについての見解の相違があるようである。私はこれを明らかにしておきたい。

（六月二十日　高槻にて）

韋提希夫人

福島政雄

そしていよ〳〵出掛けるといふことになりますといふと阿闍世王は耆婆大臣に

「象に乗つて行かうと思ふけれど、お前も一緒に乗つてくれ。といふのは親を殺したものは生きながら無間地獄におちるかもしれぬ。その時はお前がどうぞ自分の身体をしつかりと支へてをつてくれ」

と、そんなことを言つて非常に怖がりながら耆婆と一つの象に乗つて、釈尊のところへ行くといふことになつて居ります。

さて釈尊のところへ行きますと、釈尊の御説法と申しますか、お説きになる教といふものが、又特別でありまして

「若し阿闍世王よ。あなたに罪があると云ふならば、自分はもとより、三世の諸仏にことごく罪がある」

かう云ふことについて非常に懇切なおさとしがあるのであります。その結果、阿闍世王は御承知の通りに、

「自分が若しこれからさきの一切の衆生のためになるならば、今から無間地獄におちて、永遠に救はれないやうな有様であつても、一切の衆生のためならば、自分は喜んで無間地獄におちる」

といふ心持に変つてくる。不思議であります。無間地獄におちることを、あれ程怖がつて釈尊のところに来た阿闍世が、釈尊が非常に、涙の御説法であります。

「あなたが悪いと云ふんだけれど、本当は自分も悪いし三世の諸仏も悪い。あなたのお父さんの供養をうけてゐる。それでゐてかう云ふことになつてゐる。その根本の責任は自分にある」

と云ふ様なことを釈尊が仰言つて、非常に懇切なことを仰言る。それがいよ〳〵阿闍世の心を根本からとかすのであります。それで今のやうに、無間地獄に永劫に入つても、一切衆生のためになるならばかまひません、いとひま

せんと阿闍世王が告白して、そのあとの偈文のところで

「世尊は一切衆生のために
慈しみの深い父親となり、母親となつて下さつて
そして一切の衆生が狂へば仏様も一緒に狂うて下さる
丁度何かにつかれて狂乱するやうに
一切衆生の狂乱を御自分の狂乱として下さる
まことに仏様のお慈悲といふものは広大無辺である」

といふ様なことを申して、釈尊の前において仏陀を讃歎すると云ふところで、阿闍世王のことは大団円といふことになつて居ります。

さう云ふ風でありまして、実際私共、この親鸞聖人のお蔭で、涅槃経のさういふことを味はせて頂きまして、そしてそこに今の韋提希夫人の沈黙の御働きといふものが、どれ程大きく深いものであるかといふことを、私が非常に感じますところであります。

始終さう思ふのでありますが、今からさきはどうでありますか知りませんけれど、今迄の歴史を見ますといふと、歴史上有名な人の、大事な働きをした人のことは伝へられますけれど、そのお母さんのことは、名前も伝つてゐないといふのが多いのであります。楠正行と非常に申しますけれど、楠正行のお母さんが正行が自殺しようとされた時に、それをとどめたといふことは大平記にのつてゐますけれども、そのお母さんが、かねてどんな方であつたか、お母さんの名は何と云ふ方であつたかは伝つてゐないのであります。

さう云ふ風で、歴史上大事な働きをした人のお母さんと云ふものは、蔭にかくれてゐて、縁の下の力持ちでありますけれど、然しながらそのお母さんの縁の下の力持ちといふものが、本当にこの世の中を動してゐる。決してこの世の中に顔を出し、名を出して、自分こそは誰々の母であるぞと、さう云ふ人が本当に偉いのぢやない。これは西洋の人でも、ジヤン・パウルと云ふ人がありまして、その人が教育について考へを種々書いて居りますが、その中に

「母親といふものは、非常に苦労をして、この世の中に大詩人とか、その他にこの世の中に種々すぐれた人を産み出して育ててゐるけれども、その母親の苦労といふものは世の中の人から忘れられてゐる」

といふ様なことを書いて歎息してゐる。ジヤン・パウルと云ふ独乙の人でありますが、さう云ふ人もあります。

そんなものを読んで見ますと、またかう感ずるのでありまして、本当にこの世の中を動かすところのものは、その様な風なお母さん達である。その代表者として韋提希夫人と云ふ方は、非常な大事な働きをされてゐる。然も非常な愚痴ばつかりの女の様に見えた韋提希夫人が、さう云ふ風

な大事な、沈黙の間の、何とも云へない大事な影響をこの人生に及ぼして居られると云ふ、かう云ふところを見ますと、一人の母親といふ方が、この仏のお慈悲を身にうけて黙つてこの世の中にその子供さんを育て、夫を援けてをられる。その力といふものは、それは世の中に現れませんけれども、非常に大事なものであると云ふ様なことを痛切に感ずるのであります。

それで今日はこの所謂男女同権時代といふのであつて、所謂若い男女の方々、鼻意気が荒いやうであります。私共は一寸タヂタヂする様でありまして、一寸そのお相手になりかねるのでありますけれど、然し私としては、自分の母親のことを思ひましても、それから昔のさう云ふ母親、世にかくれたさういふ母親のことを考へてまゐりましても、そこに韋提希夫人のやうな姿を見る。さう云ふところに、本当にこの人生は暖められて生かされて行く。男女同権は結構でありませうが、権利を人間がお互に主張しますと冷くなります。基本的人権といふことが、新しい憲法の中心問題になつて居りまして、何かといふと、基本的人権と云ふやうでありますけれど、そんなことを言つて、男と女が争ふ。母親にも基本的人権がある、子供にもあるんだといふことを言ひ出すと、実際この世の中といふものは、殺風景なものになると、私は感ずるのであります。こんな老人になりましたのでそんなことを思ふ、古い思想かも知れませんけれども、仏法の教を頂いて、韋提希夫人のことなんか考へますと云ふと、どうもただ、権利の主張をするといふやうなことは本当ぢやない。権利は権利として重んずべきでありまして、お互が権利々々と主張し合つて、争ひを続けて行くといふ様な世の中にはしたくない。もつとも今の世の中はさうなつてゐるかも知れませんが、あそこはもすこし潤ひのある世の中になればよいが、そのために、矢張り釈尊のみ教、親鸞聖人の御教といふやうなことが、人々の心に浸みこんでいつて、韋提希夫人、さう云ふ方の生き方、心持、それが如何に人生を温め、阿闍世の心をあたためて、極悪非道とまで云はれた阿闍世と云ふものを、あんなに転ぜしめられたかと云ふことを思ひますにつけて、世の中に目に見えぬ力が働いてゐる。その目に見えない力と云ふものは確かに、女性といふうちでも、母親といふ女性の力であると思ひますのであります。

そういふところに釈尊も非常に力をいれておいでになる。それは釈尊としては、生れてすぐお母様がおかくれになつたといふことでなほ更、母と云ふことについては感じを深く持つておいでになつたに違ひないのであります。その心持といふものが、仏典に流れてゐると感ずるのであります。

三十二年十一月二十七日、夜。

清浄心

自在丸新十郎

仏教で清浄心といひますと、私共の凡夫の心ではなくて仏のみ心であります。私共の心は朝から晩まで一年三百六十五日迷ひさまよつてゐます。姿をかへてゐます。あれを思ひこれを思ひ、あれを求めこれを欲して、一瞬も静かに致してをりません。善導大師は私共の心を意馬心猿と申されましたが、正しく馬がはねまはり、猿が木から木を渡り歩いてゐる様なものです。そしてその裏には、必ず何かを要求し何かを執着してゐます。多くは金を求め財を求め愛欲を求め権利や名誉を欲してゐる様であります。

私共は正当に働いて金をもうけることは、この世では必ずしも悪くないばかりでなく、大いにそのために努力して結構なのであります。地位の向上をはかることも、決して悪いことではありません。いや正当に金や財や権利や名誉を求むることこそ、人生に必要だとも考へられませう。然しこれは私共の人生でこそさうあつて欲しいのでありまして、仏教ではこの様な欲望は決して正しい正浄なものとはみないで、不浄なものとしかみられません。なぜといいますと、そこには必ず自己といふものがありまして、これが中心となつて、金を求め財を欲し名誉にあこがれて、そこから色々醜い罪悪がかもし出されるからであります。

聖徳太子の言葉として伝へられてゐます『世間虚仮』といふ言葉は、このことをよく言ひ表はしてゐます。世間とは私たちの世界で、私たちの人生のすべてゞあります。この人生で起つてゐます色々な事柄はどんなものでも、真実といふものはない、虚仮不実といふことであります。私共は正しい行と不正な行、善い行と悪い行といふ様に、両者を区別して観善懲悪に努めてゐます。私共の社会では正善と邪悪といふものゝけじめが必要で、これがなくなりますと秩序が乱れて動物の世界とさして変らぬことになつて参ります。

然し仏教の世界では一応これらを認めないのであります。この出世間とも申してゐます仏教の世界では、善悪の区別、正邪の堺はないのでありまして、そんなものは存在しないのです。そしてこゝに実は私共の様な罪悪深重の泥凡夫の救はれる道が開けてゐるのでございます。どこでも善悪がつきまとひ、正邪がひつかゝつて参りますと、私共はどんなにしても地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人間、天上の六道の界から逃れ去つて極楽世界に参らせて頂く機会は永却こないでありませう。

出世間道には、この様な善悪正邪がないからこそ、私共がどんなに重い罪ををかしひどい悪業をつみあげましても、極楽参りができる次第であります。こゝに念仏の世界の意味があり、本願他力の世界が展開されるのであります。真宗の悪人成仏の原理はこゝにあるわけであります。念仏者は無碍の一道だと申されてゐますが、この一道だけには罪悪も業報も感ぜられないのであります。極楽浄土へ通じてゐるゆゑんであります。

聖徳太子は唯仏是真と申されましたが、人間世界のどんな善行も正義も、仏の世界ではうそいつはりでしかないのでありまして、たゞ仏のみが真実であります。言葉をかへますと、念仏称名のみが真実であります。太子が仏と申されましたお言葉は、色々なことから法身如来とて真如の世界の仏様、色も形も持たない仏様のことでないかと存じますが、それでも私共の阿弥陀如来と別に根本的に違つたわけではないのでありますから、阿弥陀如来だけが真実だと申しましても支障はないし、教行信證のなかにもさやうに説かれてゐます。だから阿弥陀如来の世界のみが真実で、その他の世界は皆うそいつはり、不真実といふことになります。こんなことから、阿弥陀如来のお心は真実心で、私共の心は不真実であることが判つて頂けると存じます。

この様な不真実な私共の凡心でどんなに立派なよい行を致しましても、それは決して真実な行とはならないのでありまして、結局は不実な雑毒雑修の善でありますから。そんな行では極楽参りはできないと親鸞聖人は注意下さつてゐます。そしてそのわけは、阿弥陀如来がまだ法蔵菩薩として修行なさつて居られた際、ちよつとの間も、体や口や心を通してなされる行がすべて真実心に基く行であつたからだ、と善導大師のお言葉を引用されて仰せられてゐます。

かやうなわけで、私共がどんなに修行をはげみましても、それが不実である限り、極楽参りはできないのであります。道綽禅師は日課として七万遍も称名されたといふことでありますが、その当時の人々はその徳化をうけて小豆一日九十石、少いもので二十石も称へたといつてゐます。

然しそれだけでは極楽参りのできないことは前の通りであります。だから私共はどうしても阿弥陀如来から真実心を頂くといふことが問題となつて参ります。勿論道綽禅師はこの過程を通られてのお称名であつたことは申すまでもありません。

ところが前に清浄心といひ今真実心と申します心は、元より如来の御心でありまして、この心を私たちが頂きますと、それが大信心といふことになつて参ります。大信心といひますと、中信心と小信心が予想されますが、凡そ信心に大中小があらう筈がありません。等しく如来のみ心だからです。

清浄心や真実心といふことについて二通りの解釈がなりたつのであります。といひますのは、親鸞聖人の悲歎述懐和讃に

浄土真宗に帰すれども
真実の心はありがたし
虚仮不実のわが身にて
清浄の心もさらになし

相対的なる

といふお言葉がございます。この清浄の心、真実の心を如来のみ心で御信心だといふ意味だけにとりまして、その解釈から、親鸞聖人は八十歳を超えられても真実の信に至らないと歎かれた、といふ意味にとつて居られる方が現在有名な真宗信者の中に居らるゝのでありますが、これは大変な誤りでありませう。人の名前をあげてその人の解釈をとやかく批判するといふことは、当人にとつては面白いことではなく、従つて又批判の再批判といふことになりまして、お互泥仕合を演ずることがよくありますが、これは私共のよくよく慎まねばならぬことだと思ひます。

真実の心はありがたしとか、清浄の心もさらになしといふお言葉は、親鸞聖人が真実の信心に至らなかつたための歎声ではなくて、真実の信心が得られたればこそ、本当に自分といふものが反省されて、信心が頂かれたならば生れ代つた様な立派な人間になれるかと思つたら、少しも変つた人間になれずに、相変らずの泥凡夫で、清浄の心もなければ真実の心もないと悲歎されたお言葉でないかと推察申上る次第であります。このことは教行信證の信の巻にも、すべての衆生は無始以来今日まで穢悪汚染で清浄心はない、虚仮詔偽で真実心はない、と断定遊ばされたことからしても推察されるのであります。即ちこゝに真実の心、清浄の心と仰せられましたのは、私たちのまことでない心に対する真実の心であり、泥田の水のやうな穢い私共の心に対する清浄の心をいつたのであります。だから清浄な心、真実の心とはいふものゝ、それは相対的な心を意味してゐるのであります。決して信心といふ意味ではないのであります。

真宗でいつてゐます信心は決してこの様なものではない筈です。教行信證の終に、『愚禿釈の鸞、建仁辛の酉の暦、雑行をすてゝ本願に帰す』とありまして、聖人は御年二十九歳にて本願他力に帰して信心が廻向されたのであります。それ以来決して信心が消滅したり中絶する様なことはあり得ないのであります。信心は金剛不壊の真心だと御自身仰せられた様に、決してこはれないのでありまして、これが不安定であつたりどうかと思はせられる様では、まだまだ決定の信とは申されないのではあるまいか。

聖人は曇鸞大師のお言葉を引かれて、私たちが無明がはれないで極楽参りの志願が満足されないのに、三つの不相応があるといつてゐます。一つは信念があつくない、それは信心がある様であつたり無い様であつたりするからである。二つには信心が一つになつてゐない、決定してゐないからである。三つには信心が相続してゐない、信心以外の雑念が浮んで信心を断続するからである。とかやうに理由をあげて居られます。

これからしても判ります様に、一度如来によつて信心が廻向されましたならば、どんなことがありましても、無くなることもなければ弱まることもないのでありまして、信じた一念から未来永劫まで相続するのであります。だから聖人が二十九才で真実心が廻向されましてからといふものは、八十才を超えても尚ほ真実の信に至らなかつたなどといふことは到底あり得ないことで、信心は終生、いや永遠に亘つて微動だにもするものではないからであります。従つて『真実の心はありがたし』とか『清浄の心もさらになし』といふお言葉が、信心がないといふ意味でないことは御理解頂けたことゝ存じます。

次に清浄心や真実心の他の意味について申上げたいと存じます。それは前よりも多少味ひ深い意味でありますが、私たちが阿弥陀如来から信心が与へられるといふことは、一体どんなことであるかといふことを考へますと判つて頂けることであります。といふのは、真実心とか清浄心といふものを信心のかへ言葉と致しますと、この心は教行信證に、『この心はすなはちこれ不可思議、不可称、不可説、一乗、大智願海、廻向利益他の真実心なり。これを至心となづく』とあります様に、如来の至心でありまして、私共の心の中に浮んでくる様な妄念ではないのであります。同じく信の巻にも『大信心海を按ずれば、……たゞこれ不可思議、不可称、不可説の信楽である』と仰せられてある様に、如来から与へて頂く信心は、考へることも称へることも説明することもできないものだと説明して下さつてゐます。

真宗のお聖教には不思議の仏智だとか、名号不思議だとか、誓願不思議など〻至る所に不思議といふ言葉が頭や尾に使用されてゐますが、これは敢て真宗だけに限つたわけではなくて、仏教全般に通ずることでありまして、これが前にも申しました様に、仏教が世間道と違つた点でもあります。私たちの世間では、どんなに無念無想でゐたいと希ひましても、雑念は絶間なく襲ひかゝつて参ります。これは思議の世界だからであります。精神は絶間なく活動して休むひまがないからであります。

これに反して出世間道といはれます仏教の世界は、精神の働かない世界であります。不思議の世界であります。無我の世界であります。はからひのない世界であります。無智の世界であります。一切皆空の世界であります。邪心邪念のない、といつて善心善念もないところの世界であります。罪悪も業報も感ずることのできない世界であります、すべてから解放された世界であります。

涅槃経の中に『苦もなく楽もなし、これ大楽である』とでてゐますが、大信心海を述べたものでありまして、御信心には楽しい気持だけの様に考へられますが、さうではなくて、楽しい気持も苦しい気持も共にないのでございます。

如来のみ心であります清浄心、真実心が信心といふ形をとつて私共に恵施されました上は、私共の心の中に不可思議、不可称、不可説の現象が現はれて参りますのも自然の道理でありませう。それが信心生活といふものでありませうか。といつて信心生活には、これぞといつてしかとした心の働きはないのでございます。もしさうではなくして、何だか清らかな真面目な心でもできたと致しますと、それは結局人間の心の迷ひでありませう。親鸞聖人ですら述懐和讃にのべられました様に、真実の心や清浄の心といふものは無いと仰せられました。

この様に信心を頂いた心といふものはどんなにしましても私共には発見できるものではございません。信心にはこんな姿だといふものはないのでありまして無相といふ姿をしてゐるものが信心といふことになりさうでございます。

それでは信心を頂いても頂かなくても同じで、別に何も心に変化は起らないと致しますと、わざわざ信心を頂く必要はないではないかといふ疑問が生れるかも知れませんが、実は信前と信後の生活には大辺な違ひがあると申上げたいのでございます。何しろ朝から晩まで、精神は休むひまもなく活動を続けてゐましたものが、全く活動を止めてしまひ、意識の働かない無意識の生活が始まるからであります。私たちは毎日何だかだと思ひわずらつて、思議の生活を送つてゐますのが人生であります。こゝに苦しみ悩みも生れ、又楽しみ笑ふ生活も生れるのでございます。ところが信心生活になりますと、かうしたことがなくなるといふわけではありませんが、更にその奥に苦しみ悩んだり楽しみ喜んだりすることのない世界が展開されるのでございますから大辺な違ひと申上げたいのです。これを通仏教的に申しますならば空の生活であります。一切空といふことが日々の精神生活の奥に開けて来るのでございます。不可思議、不可称、不可説の生活とでも申すべきでありませうか。

私共は毎日毎日物を考へて生活してゐますのに、物を考へない生活が始まると申しますと、大辺な矛盾ではないかといふ御批判を受けるかも知れません。いやよく受けてゐるのでございます。又受けなくとも、そんなことはさつぱりわからぬと仰せになる方が多いのでございます。

だが仏教は普通には矛盾としか受けとられないことが、矛盾もさせないで調和を保たしめるところに特徴と生命があるのです。如来の救済もここにあるわけで、本当ならば、罪業しかつみ得ない私たちでありますから地獄は必定でありますが、それが地獄をのがれて極楽参りができるのですから、これこそ大きな矛盾と申す他はありませんが、それが矛盾もしないで必ず極楽参りをさせて頂くことも同じ道理によるのでございませう。

仏教ではそんなことを水と波の譬をもつて説明してゐます。水の本当の性質は大変静かな点にありますが、それが大波となりますと、御承知の様にあれほどひどく荒れ狂ふのであります。然しどんなに荒れ狂ふ大波でも。元々水でありますから本当はそのまゝ静かなものであります。私たちの日々の大波小波の生活の奥には、本当に静かな水の生活がひそんでゐるのでございまして、信心生活といひますのは、いはゞこのやうな水の本性の生活とでも申し上げたいやうです。

それでは実際問題として、私たちはどんなにすれば水の本性の生活にも譬へられる信心生活が営まれるのでございませうか。釈尊は大無量寿経のなかに、その方法として至心信楽と聞其名号とをあげて説いて下さつてあります。第十八願であります。阿弥陀如来を至心に信ぜよ、阿弥陀如来の名前をそのまゝすなほに聞け、と仰せられました。そして親鸞聖人も応信如来如実言（如来如実の言を信ぜよ）とお諭し下さいました。私たちは阿弥陀如来を至心に信じ、六字の名号を名号のまゝにすなほに聞けばよいのでございます。至心に信じた信心の世界には、信じ心といふものは寸毫もないのでございます。南無阿弥陀仏と聞いたところには、聞きごたへは全くないのでございます。かうしたことを仮に信心を頂くといふ様に説明されてゐるのでございませうか。信心こそ本当に不可思議、不可称、不可説とでも申されませうか。

（完）

63.6.21

心光照護の生活

花田正夫

『求道』の第十巻第二号に、黄葉秋庭氏の法信があります。それは黄葉氏の晩年に近角先生の教をうけられて、初めて遺る瀬なき仏のまことに気づかれ、そのよろこびのあまり、家郷の方々に、自分と同じ間違ひにおちぬやうに、そして信眼にひらける広大無辺の妙境はかくの如きものである、どうか驚きを立てて聞法するやうにと願はれた珠玉の法信であります。ここに謹んで黄葉氏の法信を抄出させて頂いて、攬教照心の縁とさせて頂きます。

氏は「幼にして儒に学び、壮にして西学を唱へ、老いて禅に遊びたり」といふ風でありましたが、晩年には禅から真宗に移られ、自分では法悦者として自任して居られたのであります。

処がたま〳〵近角先生の御講話を聞かれて「三十年来の不心得」に気付かれ、仏法が自分の問題となつたのであります。誠に聞法の途上、間違ひを間違ひと知らせて頂くといふことは正しい道に出る第一歩であります。私共は、虚妄分別の我執を中心として、自分は正しい、間違ひはないと、自分勝手な独りぎめでゐる間は、何処までも迷ひ続けるものであります。処が自分の歩みはどうも怪しいとなると、一寸した旅でも、よく知つた人に尋ねずには居られません。さて、黄葉氏を驚ろかせたのは、近角先生の次の数語でありました。

『普通世間に信仰を得たと思ふ人の心得を露骨に打出して見れば「我はもとより罪業の凡夫である。併しこの罪業はすこしも気にかけるに及ばぬ。このまゝで弥陀大悲の摂取にあづかるのである。その上の称名は大悲の鴻恩を感謝する念仏である」と。

これが普通信者の腰の据へ場である。この様な信仰は根本がないから早晩壊れて仕舞ふ。何故なれば、真面目に

大悲の本願に対せずして、自分の方へのみ目を付けて居て、如来の方はぼんやりと眺めて居るばかりである。其結果は、罪業は罪業……救済は救済……如来様は如来様……と云ふやうな具合に、三者が離れ〳〵になつて居る、決して絶対他力の妙境に融合して居らぬ。それ故、お慈悲を悦ぶといふも偏へに私心でこれを悦び、報謝といふも義理一ぺんの心得で、私心を以て空念仏を唱へて居る。殆んど自力の境界を脱して居らぬ』

この数語で三十年来、金城鉄壁と聞きかためた信念は砕け、千仞の谷底へ蹴落とされたといふか、赤児が慈母の懐から投げ出された様に茫然自失の状態になつて、一時は近角先生を仇敵のやうな眼で見られた由であります。

然し、足下に火がついたので、じつとして居られないで近角先生の御講話を次から次と聞かれたのであります。すると時には御講話を聴聞してゐるうちに、胸中の紛擾がしらず〳〵解ける様な心地もしたけれど。時がすぎると矢張り駄目、さうしたことを繰り返して居られた時、

『信心は得るでなく、得さして頂くのであるから、如来様に、真正面に向かねば駄目である。罪業がどうだの、何がかうだのと、自分の方ばかりに目をつけて居るは駄目である……』

との近角先生の仰せが、落雷の如く胸に響き、あとはもう、何も耳に入らなくなり、「真正面に向く、々々々」とこの言葉ばかりを繰り返し、夜も寝られなくなつた。そして心に浮ぶのは、あれも、これも、自力のはからひ、間違ひばかりと、尽きることもなく、果てしなく、さういふことばかりが心に湧き出てやまず、寝床の中で転々反則してゐるうちに

『その仕様のない者が可哀想である！』

の先生の一言が思ひ出され、その刹那に、

『あゝさうであつたか！』

と思ふや否や胸中の紛擾は雲霧の晴れ渡る如く解け、悲喜の涙の中に、フト気付くと「自身は今現に如来様に真正面に向つて、赫々たる御光明に包まれて居り、その光明のお蔭で、自力信仰の巣窟の奥まで見せて頂いてゐる。嗚呼勿体ない」と、述懐して居られます。

○

黄葉氏は、斯様に御自得をのべられて、そこに仏智に照らし出された自力心の内容と、他力信にひらかれる妙境を対比して、且つは慚愧し、且つは感謝して居られます。

一、信前に自己を観察せし時、自己心を以て自己心を点検せしを以て、過去も未来もともに闇黒。

信後は、他力本願の光明に照して自己心を観察さして頂くをもつて、過去、未来ともに明瞭、なかんづく、過

去現在にわたりて、自己の虚偽迷妄なること歴々として指すが如し。益々大悲の遺る瀬なきに泣く。

二、信前は、煩悩の起るたび、信仰心をかり来りて、これを鎮圧せんと努力せしを以て苦痛を感ぜし。

信後は、煩悩の起るたび、これぞ大悲御本願の基たるを思ひ反つて感謝を生ず。

三、信前、外界の迫害に遭ふとき、完全を外界にもとめたりしを以て、憤慨の念を生ぜし。

信後、外界の迫害に遭ふとき、大悲の慈光に照らされて見れば、私も亦外界の一部分なることを感得するを以て矜哀の念を生ずるも、憤慨の心起らず。

四、信前、御聖教其他信念に関する本を読み又は法話などきくとき、自己の思慮を以て測度せしを以て、その言句のみを見聞して真意を解することあたはざりし。

信後は、他力の心眼をもつてこれを玩味さして頂くやうな心持あるを以て、その真意肝に銘じて歓喜踊躍の情あふる。

五、自己の妄念に役せられしを以て、身体の健康を害し精神を弱む。他力の信念に養はるゝを以て、身体健康にして精神旺盛なり。

六、自力心を以て職務に当るを以て、過失あれば責任を免れんと欲し、功あればおごれり。

信後は、他力信心に基きて職務に当るを以て、過失あれば大悲の矜哀を思ひ、功あれば大悲の恩を謝す。

七、自力心を以て一身を処せし間、順境に於ては懈怠高貢の心生じ、逆境に於ては失望落膽す。

他力信心に身を任すを以て、順境に於ては御慈悲を喜び、逆境に於ては大悲矜哀の御心に接す。

八、孤独に居りて寂寥を感ぜしも、信後には、孤独に居るも大悲の身と共に居ますを知るなれば藹然たる法悦自然に湧く、

九、信前、是非去就を決するに臨み、自己の小智を頼みとせしを以て、利害の計較に傾き、知らず〳〵不公平に陥りたり。信後は、他力の慈光によりて自己を客観的に観察するを以て、精神の悔恨をも超えて利害心に碍げらるること尠し。

十、病患貧苦に陥りし時、病患貧苦を以て自己心の煩悶にたゆる能はざりし。

信後は、病患貧苦に陥りし時、病患貧苦を病患貧苦としておいて、別に大悲の他力心に安住す。

その一つ一つ、誠に無尽の法味のあふるるものばかりであり、大悲の願船に乗じて光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かにして、衆禍の波転ずる信境であります。

正信偈私解（六）

白井成允

第十八願文に言はく

設「説ひ我れ仏を得たらんに、十方の衆生、心を至し信楽して、我が国に生まれむと欲ひて、乃至十念せむ。若し生まれずば、正覚を取らじ。唯五逆と正法を誹謗せむとをば除かむ」と。

願

此の願文の意を祖聖は「尊号真像銘文」に詳しく釈してをられる。言はく

「設我得仏といふは、もしわれ仏をえたらむときといふ御ことばなり・十方衆生といふは、十方のよろづの衆生といふ也。至心信楽といふは、至心は真実とまふすなり、真実とまふすは如来の御ちかひの真実なるを至心とまふすなり。煩悩具足の衆生はもとより真実の心なし、清浄の心なし、濁悪邪見のゆへなり。信楽といふは、如来の本願真実にましますをふたごころなくふかく信じてうたがはざれば信楽とまふす也。この至心信楽はすなはち十方の衆生をしてわが真実なる誓願を信楽すべしとすゝめたまへる御ちかひの至心信楽也、凡夫自力のこゝろにはあらず。欲生我国といふは他力の至心信楽のこゝろをもて安楽浄土にむまれむとおもへと也。乃至十念とまふすは、如来のちかひの名号をとなへむことをすゝめたまふに、偏数のさだまりなきほどをあらはし、時節をさだめざることを衆生にしらせむとおぼしめして、乃至のみことを十念のみなにそへてちかひたまへるなり。如来より御ちかひをたまはりぬるには、尋常の時節をとりて、臨終の称念をまつべからず、たゞ如来の至信信楽をふかくたのむべしと也。この真実信心をえむとき摂取不捨の心光にいりぬれば正定聚にさだまるとみえたり。若不生者不取正覚といふは、若不生者はもしうまれずばといふみこと也。不取正覚は仏にならじとちかひたまへるみのり也。このこゝろはすなはち至心信楽をえたるひとわが浄土にもしうまれずば仏にならじとちかひたまへ

海

願

るみのり也。……唯除五逆誹謗正法といふは、唯除といふはたゞのぞくといふことば也。五逆のつみびとをきらひ誹謗のおもき咎をしらせんと也。このふたつのつみのおもきことをしめして、十方一切の衆生みなもれず往生すべしとしらせむとなり。」

此は正嘉二年祖聖八十六歳の御筆である。如来の本願の釈文として、青年の日より此の老境に至るまで、人生のあらゆる悲喜を通し辛酸を通して験め味ひ来りたまへる、深きに徹し広きを尽したる、血涙の文である。私共は願文とともにくりかへしくりかへし拝読して身に省みるべきである。今三願転入して終に安んじたまうた処は此の十八願文の根本の意である。之を選択の願海といひ、此処に恵まるを難思議往生と云はれる。如来が私共衆生を救ひて御自らと等しき仏の正覚を成らしめんが為に選び択びて成就したまへる御自らの尊号を私共に恵み賜はり、其の尊号に具はれる至極の徳力の自然の御はたらきとして、私共を摂めておのづからかの如来の正覚の華咲く境界、清浄国土に至らしめたまふこと、もとより私共の思議を超えたる、如来の廣大無辺不可思議なる御はからひに由るが故に、かく称ばれるのであらう。此の三願転入の御告白も亦此の仮・真・引願三門を三願文に於いて証することも、三往生の称も、此等は総べて祖聖が越後常陸等に在りて多年経論に沈潜しつゝ御自らの信の展開を反省し、教行信証を組織したまふに至りて此の如き表現に思ひ至りたまうたのであらう。然し此の如き組織的表現は多年の思索と反省との果であられたとしても、而も此に至るを得しめたる根本体験は、即ち御自ら「本願に帰す」と告げたまひし如く、二十九歳にして法然上人に値ひまゐらせたまうた時に獲させたまうた所に他ならない。此の時の根本体験こそ祖聖の廿年の勤修と祈願と悉く空じ去られると与に如来の久遠劫来の悲願の忽ち満ち入らせたまふ不可思議の刹那であられた。真に人類の精神史を転回せしめる希有最勝の刹那、驚歎に堪へざる刹那である。

此の刹那は、祖聖自ら「親鸞におきてはたゞ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしとよきひとのおほせをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり」と告げたまふ所によりて知られるように、偏へによきひと法然上人の教に順ふところに現れたる刹那であり、御自らの廿年の勤修も祈念も悉く師上人の口より響き来る言葉の中に吸ひとられて空しくなり、たゞその御言葉のまゝに心身挙げて如来の願力の中に融けこんでしまつた刹那である。信ずるとは此の如き刹那の心である。こちらが空になつて如来の真実心が入り満みてしまふ、こちらはもうどうすることも出来ない、たゞ其の刹那の心である。歎異抄に此の刹那を廻心と云ふ。

「一向専修のひとにおいては廻心といふことたとたゞひとたびあるべし。その廻心とは、ひごろ本願他力真宗をしらざるひと、ひごろの心にては往生かなふべからずとおもひて、もとのこゝろをひきかへて本願をたのみまいらすをこそ廻心とはまふしさふらへ。」此のたゞひとたびの廻心、我が全心を挙げての根本回転、是れ一切の自力を棄て、自力から湧く祈念を棄て、唯だひたすらに如来の願力にまかせまゐらする心の醒めである。自力を棄てようとか他力にまかせようとか自分がはからひて然様にするのではない。よきひとの言葉を聞いてゐる間に、その束の間に心が然様になつてしまふのである。私の知らぬ久遠の古から仏かねてしろしめして此の煩悩熾盛罪業深重の私を哀愍れみ護りて今日に至るまで御苦労下された、必ず救ふと誓はせたまひて御名を賜ひてあらせられた。此の如来の御真実に心が貫かれ満たされて、どうにもならず、唯如来のおぼしめしのまゝにとなつてしまふのである。祖聖は法然上人の言葉のまゝに此の廻心の根本体験を経られたのである。

智慧光のちからより　　本師源空あらはれて
浄土真宗ひらきつゝ　　選択本願のべたまふ。
曠劫多生のあひだにも　　出離の強縁しらざりき
本師源空いまさずば　　この度空しくすぎなまし。

祖聖が法然上人を追憶せられるあらゆる言葉は　悉く是れ此の根本体験を得しめ、生死出離の唯一真実道に立たしめられたる無二の恩徳に呵ぶ感激から発する。

法然上人は、幼くして父君に別れたまうた日から、当時の日本民族の偏く陥れる悲劇を一身に味ひつゝ山に入りて道を修むること三十年、八宗を兼ね学びて無双の智者となられながら而も猶出離生死の一大事に心安らはず、泣き泣き蔵経を閲して偶善導大師の観経疏の文、「一心に専ら弥陀の名号を念じて、行住座臥、時節の久近を問はず、念々に捨てざるは是を正定の業と名づく。彼の仏の願に順ふが故なり」に至りてこの　順彼仏願故の五字の心に染み徹りて、長く生死を離るゝの道を感じ、之に由りて念仏宗を開き興すの端を得たまうた。其故に法然上人の御心の中には釈迦牟尼以来三国の高僧等によりて伝へられ来れる仏法の伝統が、専修念仏の一行を彼の仏の願に順ふ往生極楽の大道として、流れ溢れてゐる。其の大いなる法水の流れの中に、今、祖聖は入らしめられたまうたのである。

私はこゝに法の伝統に於ける人の重要なる意義を思ふ。法あるが故に人あらはれ、人あらはるゝが故に法伝はる。人と法と一味にして仏の法水は偏く世を潤すのである。蓮如上人が信心獲得の上に善智識の缺くべからざるを誡めたまふもの、祖聖の法然上人を仰ぎたまふ御心に由来すること深くあられたであろうと思はれる。

七頁下段へ

編集後記

去る八月七日。宝物虫干の日、三河の妙源寺に参詣し、親鸞聖人の宝物を拝観。ことに、聖人御真筆の十字名号、聖人書写されし法然聖人の御影、更に光明本尊、等々、その前に蹲居して去り難いものばかりでありました。私はここ二ケ月、拝観による感銘の深さに、御来庵下さる方々や日曜例会に集られる方々に、しつこくお話し申して居ります。毎年八月七・八日が御開帳日であります。御縁の御方には是非御参詣のことをお勧めいたします。岡崎市矢作町桑子、にある聖人に由緒の深い寺であります。

ことに聖人が御生涯、肌身離されず御奉持なされた、選択相伝の法然聖人の御影は、その讃文は法然聖人の御真筆になり、其の流れを汲まして頂く我等には、乃感交々胸に迫り、さすが鈍根遅愚の身にも涙なくしては拝まれぬものでありました。

○

去る日、上田義文さんからお聞きして、その感を深めましたのが、ゲエテの言葉「人類は進歩するが人間は進歩しない」という至言であります。昔は籠、それから人力車、次に自動車、汽車、電車、飛行機、と交通機関だけでも大変に進歩しましたが、さて人間そのものは、ちっとも苦も減らず、楽も増さない、何時まで経つても煩悩の奴となつてはてしない生死の荒海を辿つてゐる、これから何千、何万年たちましても同様であります。ここに生死の荒海からの解放の道、即ち仏陀の慈光は、常恒不断に、日月が世界を照す如く、人類にはなくてならぬものであります。

私共は眼前の科学的進歩に幻惑されて、自分は文化人で何千年前の人の説かれた道は、骨董品である、無用であるといふ風な錯覚におちない様、脚下照顧が大切であります。

○

△「至心廻向の意義」の近角先生の三信の稿を終らせて頂きました。『至心に廻向したまへり』の聖意を、懇切に拝読させて頂きました。九月の第三日曜に岐阜高田の景陽寺御夫妻が来庵下されて「大正九年頃、信仰が私自身の問題となり近角先生の法縁に浴し、初めて今日に及びました。最近先生の御文が慈光で拝読出来ますので、何よりも嬉しく有難く思つて居ります。私も七十になりました……」とのことでした。

△「父と子」の池山先生の原稿は、聖鸞誌から頂きました。極く御晩年の頃の御法悦の一端であります。来月は先生の御正忌に当りますので次号にこの続きを載き、記念といたします。先生の遺詠。

わが庭の萩さかりなりここかしこ
白き孔雀のむれゐるがごと。

△「草提希夫人」の福島先生の御講話これで完了いたしました。教へられることの多く改めて謝しまつります。これから「善知識を訪ねて」の善財童子の求道を頂きます。

△「清浄心」の自在丸先生の御原稿は早く頂いて居りましたのに、今回掲げさせて頂きました。終戦以来、もり〳〵と信懐を表白して下さり、「仏法ひろまれ」の一念に燃えられつつ、九州工大の方で先生をして居られます。御住居は、戸畑市中原、九工大官舎であります。

△「正信偈私偈」は本夏先生御入院中に御執筆下さいました。先回が（五）でありましたのに（六）と誤記いたしました編集者の不注意、呉々も御詫び申し上げます。すでに御退院なされ、高倉会館の彼岸会の御講話もせられるまでに御恢復下さいました

△「心光照護の生活」は、黄葉秋庭様の法信を中心に、我身への鏡とさせて頂きました。求道十巻より頂く。

御　案　内

毎月、第一、二、三日曜、午後一時半、日曜例会。一道会館に於て。市電、新郊通一丁目下車。東一半丁、

毎月廿四日、午前、午后、市内昭和区小桜町、教西寺、法話会。市電御器所通下車。

定価　一部　三十円（送共）
半年　百二十円（送共）
一年　二百四十円（送共）

名古屋市南区駈上町二ノ二八
編集・発行人　花田正夫
名古屋市千種区千種町馬走二八
印刷人　本田政雄
名古屋市南区駈上町二ノ二八
発行所　慈光社
振替口座名古屋一〇四七〇番

慈光　第十巻第十号昭和三十三年十月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可